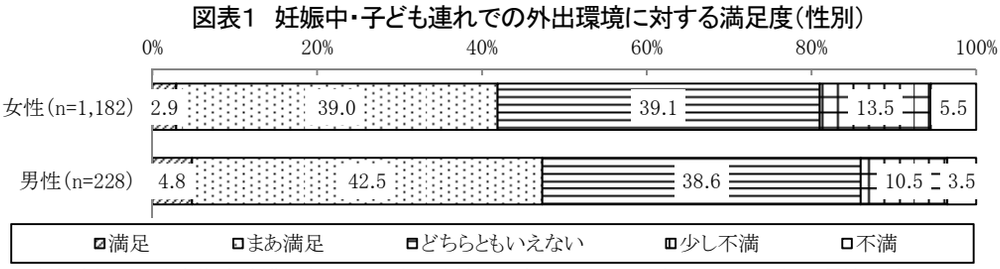
研究開発室
北村 安樹子

子ども連れ外出のしやすさを考える

＜子ども連れでの外出環境への満足度と外出時の不安や困難＞

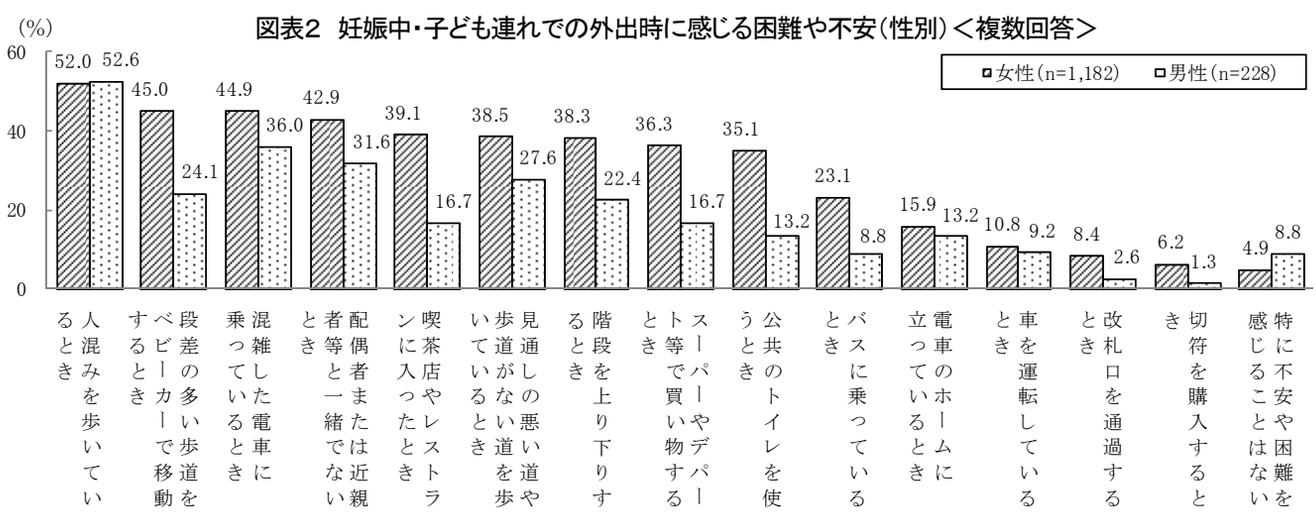
こども未来財団が妊娠中もしくは出産後３年未満の全国の18～49歳の女性とそのようなパートナーがいる男性を対象に行った調査によると、妊娠中・子ども連れでの外出環境に「満足」または「まあ満足」と答えた人は女性では41.9%、男性では47.4%を占める（図表１）。一方、この調査では妊娠中・子ども連れでの外出時の不安や困難についてもたずねているが、「特に不安や困難を感じることはない」と答えた人は女性の4.9%、男性の8.8%に過ぎない。つまり、外出環境に満足している人の方が多いなかにあっても、９割以上の男女は妊娠中や子ども連れでの外出時に何らかの不安や困難を感じていることがうかがえる（図表２）。

図表1　妊娠中・子ども連れでの外出環境に対する満足度（性別）



注　:回答者は、妊娠中もしくは出産後3年未満の全国18～49歳の女性1,182名およびそのようなパートナーがいる男性228名.
資料:こども未来財団『子育て中の親の外出等に関するアンケート調査』2011年1月．調査時期は2010年12月、調査方法はインターネット調査。

図表2　妊娠中・子ども連れでの外出時に感じる困難や不安（性別）＜複数回答＞



注・資料とも図表1に同じ。「その他」は省略。

＜不安や困難にみる男女差＞

具体的に、不安や困難の内容をみると、男女とも最も多かったのは「人混みを歩いているとき」であり（男性52.6%、女性52.0%）、混み合っている場所や時間帯に歩いて外出しなくてはならない状況下で

（ホームページの掲載は2013年12月）

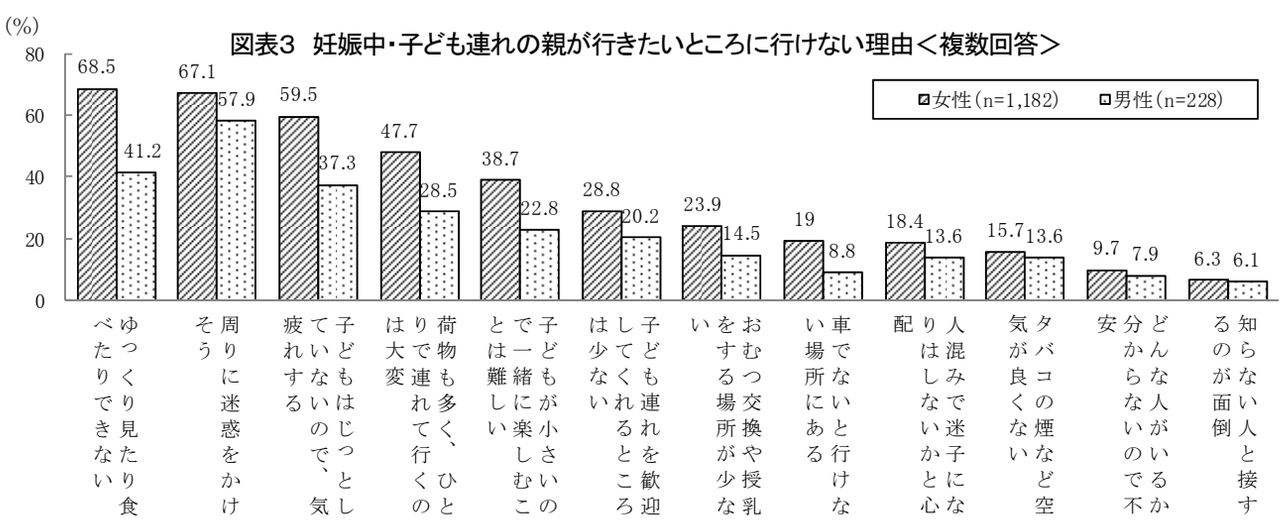
不安や困難を感じると答えた人が男女に共通して多い。また、女性では「段差の多い歩道をベビーカーで移動するとき」(45.0%)、「混雑した電車に乗っているとき」(44.9%)、「配偶者または近親者等と一緒でないとき」(42.9%)、「喫茶店やレストランに入ったとき」(39.1%) などの項目がこれに続き、いずれも男性に比べて大幅に高い割合を占める。妊娠中や子ども連れでの外出のしやすさを考える場合には、外出先として人が混まない場所や混雑しない時間帯を選べる環境とともに、女性が感じている不安や困難をパートナーの男性が理解することも重要になると考えられる。

＜子ども連れ外出への女性の気兼ねと周囲の迷惑感を和らげる環境＞

一方、図表３は、同じ調査で行きたいところに行けない理由をたずねた結果である。最も多い理由は「ゆっくり見たり食べたりできない」(68.5%) であり、「周りに迷惑をかけそう」(67.1%) や「子どもはじっとしていないので、気疲れする」(59.5%) などがこれに続く。確かに外出の目的が余暇活動で、外出先が子ども連れの人以外も利用するフォーマルなレストランやコンサートホールといった場所だとすると、じっとしていたり、静かにしていることが難しい時期の子どもを連れて行くには相当な勇気が必要である。子ども連れではない周囲の人がゆっくり飲食したり、鑑賞する時間を邪魔してしまう可能性が高く、マナーとしても問題を感じるからだ。

このような外出では、周囲の人への迷惑を気にする女性ほど、行きたい気持ちを抑えて外出を控えるものだ。このような女性が気兼ねなく外出できるようにするための対策には２つの方向性がある。１つは子ども連れの人のための専用の場所か、時間帯を設けることであるが、筆者が期待するのはもう１つの方向性だ。それは、子ども連れの人や周囲の人に子どもの動きや声が気になりにくい環境を創り出すことである。例えば屋外コンサートやオープン・カフェには子ども連れの人が周囲の人への気兼ねを感じにくく、周囲も子どもの動きや声が気になりにくい要素がある。屋外の開放感に加え、太陽の光や街路樹のざわめき、通行人の存在など屋外環境に備わるさまざまな動きや音が、子どもの動きや声をうまくカムフラージュしてくれる。場所は限られるであろうが、これらの対策によって、子ども連れで外出する女性の抵抗感と子ども連れではない周囲の人の迷惑感を同時に和らげることができる可能性がある。

図表3　妊娠中・子ども連れの親が行きたいところに行けない理由＜複数回答＞



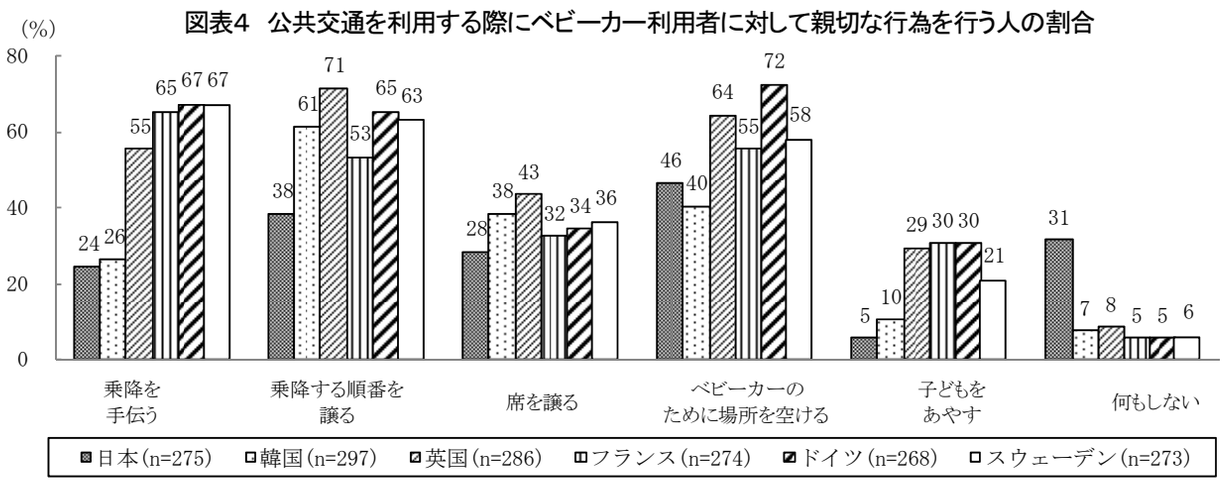
注・資料とも図表1に同じ。「その他」は省略。

＜日本人はベビーカー利用者に冷たいのか？＞

子ども連れでの外出に関しては、近年、公共交通機関内でのベビーカー利用をどのように考えるかをめぐって社会的関心が高まっており、現在、国土交通省が設置した「公共交通機関等におけるベビーカー利用に関する協議会」においてルールやマナーに関する議論が行われている。この協議会ではベビーカー利用者が公共交通機関を利用した場合の周囲の反応に関する調査結果が示されており、日本ではベビーカー利用者に対して「乗降を手伝う」「子どもをあやす」といった何らかの親切行為を行う人の割合が英国やフランス、ドイツ、スウェーデンに比べて低い一方、「何もしない」と答えた人の割合が他国に比べて高くなっている（図表４）。

このような違いの背景には何があるのだろうか。建築的なバリアフリー環境の違いや人口密度、通勤・通学時間帯を中心とする公共交通機関内の混み具合といった環境要因のほか、ベビーカー利用者の外出目的やマナー、外出時にベビーカーを利用する理由、子ども連れで外出する理由といった個別要因もあるだろう。多様な要因を整理した上での議論が期待される。

図表4　公共交通を利用する際にベビーカー利用者に対して親切な行為を行う人の割合



注　：調査対象者は6か国の首都・都市圏（日本（東京都市圏）、韓国（Seoul、Incheon）、英国（Greater London）、フランス（Île-de-France）、ドイツ（Berlin、Brandenburg）、スウェーデン（Stockholms län）居住者。20代、30代、40代の男女各50サンプル、各国計300サンプル。調査時期は2012年12月～2013年1月、調査方法はインターネット調査。

資料：国土交通省第1回公共交通機関等におけるベビーカー利用に関する協議会　資料5　（http://www.mlit.go.jp/common/001002191.pdf）より筆者作成

＜子ども連れ外出のしやすさをめぐる議論への期待＞

ところで、個人差もあろうが、妊娠中や幼い子どもをもつ人のなかには、ベビーカー利用を含めて、子ども連れでの外出に対する周囲の批判的な意見を見聞きしただけでも、外出そのものに気後れを感じてしまう人もいる可能性がある。先にみた余暇目的の外出と同様に、そこには子ども連れでの外出によって周囲に迷惑がかかることを強く気にする人ほど、外出に消極的になったり、外出をあきらめてしまうという可能性があるからだ。

これを機会に、ベビーカー利用をめぐるルールやマナーを含めて、子ども連れでの外出のしやすさが少しでも向上するための議論が深まることを期待したい。